五十嵐 真帆
Maho Igarashi
岩手県立山田高等学校 2 年生

私の応募動機

私が研修に応募した一番の理由は、「山田町の復興のために自分から行動したい」と思ったからです。私達の学年では、震災当時のことや復興に向けて様々な職業の方から話を聞く機会がありました。その中で分かったことは、「復興には私達のような若い人の力が必要だ」ということです。しかし、私は考えるばかりで、行動に移したことがまだありません。今回の研修はそれを行動に移すための第一歩になると考えて応募を決めました。

私の目標と目標達成度

「学び成長する」
100%
達成

「つながり」

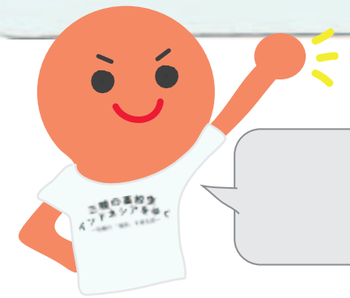
私は「町の復興のために自分にできることを考え、行動できるようになりたい。また、たくさんのことを学び成長したい。」という思いでインドネシア研修に参加しました。

本研修で最も印象に残ったことは、『津波ミュージアム』での体験です。津波の状況を実際に体験し、映像や写真、模型なども見ました。遺体が写っているものも展示されており衝撃を受けたと同時に、津波の恐ろしさを改めて実感しました。また、館長さんの「アチェにいる人は元気、生活は元に戻り未来に向け頑張っている。」というメッセージが印象に残っています。

『被災地の観光地化』について行ったディベートでは、自分には無かった考えを聞くことができ勉強になりました。「次世代に残したい」という賛成の意見、「被災者の気持ちを第一に」という反対の意見。どちらも共感できるし、答えが無いので難しい議題でした。このディベートでは、自分の町の未来について真剣に考えることができました。また、「自分の意見を伝える難しさ・大切さ」も知りました。

現地の高校生との交流会、ホームステイでは言葉が通じなくても楽しさを共有することができました。コミュニケーションの方法は言葉だけではないと実感しました。事前研修から事後研修までを通して、たくさんの交流がありました。普段の生活ではなかなか気付くことのできない「人とのつながりの大切さ」を感じました。この「つながり」をこれからも大切にしていきたいです。

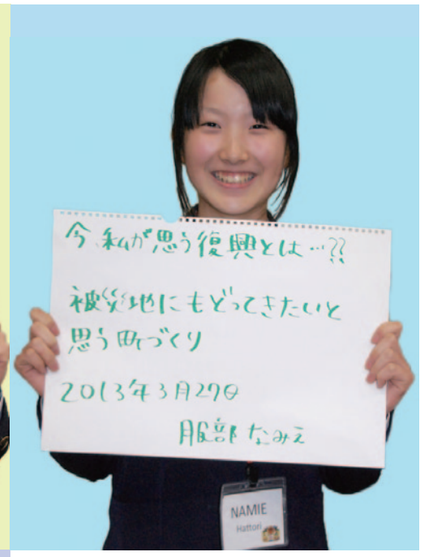
インドネシア研修に参加したことで、今まで抽象的だった「復興」へのイメージを具体的に考えられるようになりました。研修は終わってしまいましたが、私たちの「復興」への取り組みはここからがスタートです。私はまず、今回の研修で感じたことを「人に伝えていきたい」と思っています。そして、次のステップへつなげていきたいです。

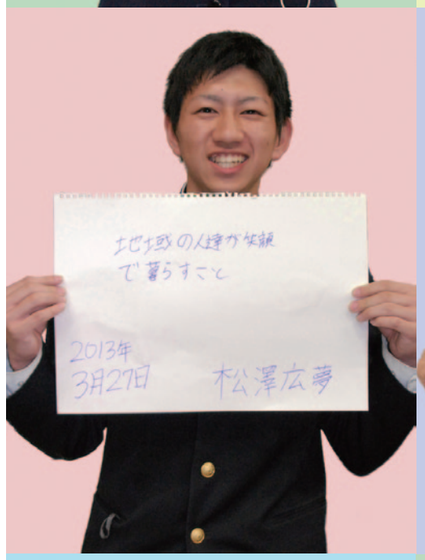


宣言「私は動き出す！」

人に伝えていく。

＜研修のおもいで＞

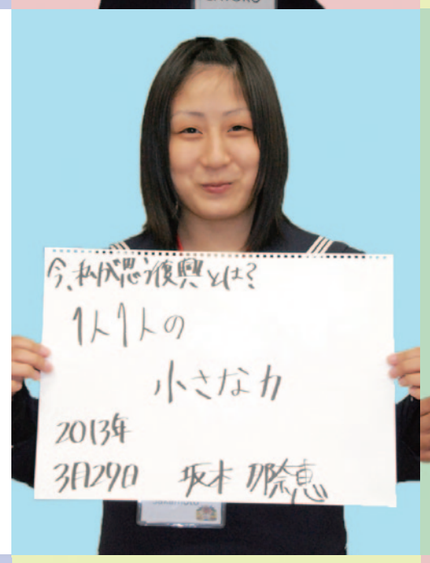


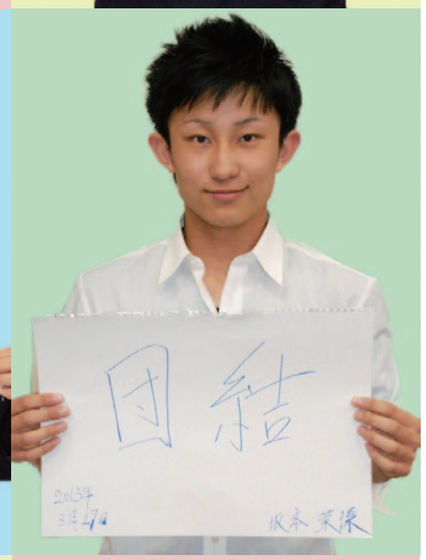


私が思う復興とは

インドネシアからの帰国後、
それぞれに思う復興への答え
を発表しました。

2013 年 3 月 27 日 (水)
JR 新花巻駅にて





同行スタッフ手記

「インドネシア研修に同行して」

グッドネーバーズ・ジャパン　震災復興支援部　高久将一

私は、スタッフという立場でこの研修に参加しました。「故郷の復興」といういわば答えのない問題に対して高校生たちがどのように取り組むのか、そして、彼らが出す答えはどのようなものなのか、研修参加前からとても楽しみにしていました。

１日ごとに目に見えて成長してゆく研修生たちを間近に見て、彼らを応援するという立場でこの研修に携われたことをとても嬉しく思っています。また、時には大人の頭では考えられないような斬新なアイデアが出てきたり、深い問題意識を持っていたりしたことに驚かされました。

研修生の成長の手助けをするというのが私の仕事でしたが、彼らと共に研修に参加する中で、私自身が成長することができ、研修生みなさんから大きな力をもらったような気がします。これから将来の復興を担う世代の研修生たちですが、このような素晴らしい人材が岩手県にいるのであれば、明るい未来を描くことができました。研修生みなさんの心に灯された問題意識という明かりをこれからも絶やさず、将来に向かって進んでもらいたいと願っております。この研修をサポートしてくださったすべての皆様に感謝いたします。

「岩手三陸の宝」

公益社団法人青年海外協力協会 椋野まゆみ

2012 年 1 月 27 日の初回事前研修時に感じた不安を今でも鮮明に覚えています。故郷の復興への熱い想いを語ってくれた面接時とは違い、きゃっきゃと騒いでいる事前研修時の彼らを見て「イマドキの高校生」という文字が頭に浮かび、少し違和感を覚えました。それと同時に、これが彼らの飾らない本来の姿なのだとも思いました。

しかし私がインドネシア研修で見たものは、現実を直視し懸命に考え、真摯に活動に取り組む研修生の姿でした。また日本の生活環境とは大きく異なるインドネシアのそれを受け入れ、楽しもうとしている彼らの姿に驚き感心しました。

また、研修生の成長ぶりも垣間見ることができました。普段は友達の前ではほとんど真面目なことを話さない竜也が、5 日目のムラボ高校で披露したソーランについて「皆で出す声が小さくて、良い踊りではなかった。次の披露では一番声を出すから」と真剣な顔でソーラン隊長の広夢に約束していました。男同士の堅い約束のようでした。そのソーラン隊長の広夢は、15 人をまとめソーランの練習を先導することに自信がなく、いつも私やスタッフの意見や指示を待っていました。

しかし、現地のホテルで最後のソーランを皆で練習していた時、彼は私の意見を求めることなく自ら時間を決め、練習方法も自分で考え、夜遅くまで踊りを教えていました。移動中のバスの中では、かなちゃんとななえちゃんがアハマドさんと話をしていました。内容を聞くと、被災した高齢者がどうすれば生きがいを見つけられるのかについて尋ねていたようでした。連日のハードスケジュールのため睡眠をとっているメンバーもいる中、現地の人からじっくり話が聞けるチャンスを彼女たちは逃さなかったのです。二人の地元復興に対する意識の高さに畏敬の念すら覚えました。さらに決定的だったのは、6 日目のディベートです。ストップをかけないと延々と続きそうなほど討論は白熱し、ほぼ全員が自分の意見を述べていました。彼らの故郷の復興を本気で考える気持ちが伝わってくるような、あの時の空気は今でも忘れられません。こんなにも真剣にまちの復興に向き合っているこの子たちは、岩手三陸の宝です。

「今どきの若者は海外に興味がなく外に出たがらない」と企業の人事課が嘆いていると聞きますが、インドネシア研修生 16 名は「イマドキの若者」とは確実に違う、心に大きな信念があるように感じます。将来彼らがどんな道に進むのか、このインドネシア研修をどのように人生に活かしてくれるのか、今から楽しみで仕方ありません。

「インドネシア研修を終えて」

グッドネーバーズ・ジャパン　ファンドレイジング部　東江菜の葉

震災から約 2 年、私の住む東京は、何事もなかったかのように明かりと騒音に溢れています。一方で、メディアの報道では依然として「被災地」「被災者」「復興」の言葉が並びます。東京との温度差と相まって、私にはメディアに載るこれらの言葉がひどく浮いて見えました。「自分の町を良くしたい」「大好きな故郷を復興させたい」という高校生達のまっすぐな言葉からも分かるように、彼らにとってそこは自分の町であり、故郷であって、単なる「被災地」ではありません。

全体論も大切ですが、「被災地」も「被災者」も「復興」も、その中にたくさんの「個」が存在するという事を認識するべきで、安易にまとめて使うべきではないと今回の研修を通して改めて感じました。

2004 年に津波被害を受けたインドネシアのアチェで、研修生達は自分の町と異なる「被災地」を見て、「被災者」と出会いました。自然災害に対する考え方、遺体の扱い方、被災の痕跡の利用…自分とは違う価値観に触れ、多くを学んだと思います。更に、こうした気付きを個人の感想で終わらせず、研修生同士で議論を重ねました。同じ日本人でも色々な考え方があり、どんなに小さなコミュニティでも意見が割れる可能性がある、という事を痛感したはずです。故郷の現状と真剣に向き合っている彼らでなければ出せないであろう鋭い意見が多数飛び交い、聞いている方も考えさせられる議論でした。

また、研修生達は行く先々で自分達の故郷や東日本大震災について紹介し、言葉の壁を越えて交流を重ねました。「人に伝える力」を身につけた彼らがどれほど故郷に貢献できるか、とても楽しみです。

個性溢れる高校生達と研修を共にし、「復興」とは、彼らの故郷が「被災地」と一括りに呼ばれなくなる事だと私は感じました。過去を消し去るのではなく、「被災地」という言葉を乗り越えて、それぞれが魅力的な町を再生していってほしいと思います。

研修生の皆さんへ

私が初めて東日本大震災の被災地に入ったのは、震災当日から10日後の2011年3月21日でした。瓦礫だらけとなった被災地は風と匂いのある映画を見ている様で、私は何が起こったのか状況が理解できず困惑する事もできず、ただ茫然と立ちすくんで周りを見渡したのを今でも昨日の様に覚えています。あの日の震災から3年が過ぎようとしています。復興にはこれからもまだ長い時間がかかるでしょう。

これからの未来を作っていくのは、これから大人になっていく皆さん達です。もし、津波が来なければ自分のまちの将来を自分の将来と重ね合わせて考えていく人は少なかったと思います。津波は沢山の人から大切な人や物を奪いました。しかし、津波をつらく悲しい事だったとか悲惨だったという事だけでなく、この津波を皆さんのこれから続く長い人生をより良くするためのきっかけに変えてもらいたいと思い、今回この研修を企画しました。ただ、この研修はあくまでもきっかけにしか過ぎません。例えるならば、今回の研修は皆さんを0から1にしただけです。今後、その1を10にするか100にするか、もっともっと大きな数字にするかは皆さん次第です。皆さんにはこの研修を踏み台にして、しっかりとこれからの人生を歩んでいって欲しいと思います。

これから皆さんの人生は大きく広がっていきます。それは数えきれない程の沢山の人達に出会うことでもあります。研修期間内、普段では会うことの無い人と出会い、その人たちと沢山話をしましたね。研修生同士で長時間に渡りディベートも行いました。復興というたった一つの言葉に関する答えだけでも色んな意見があり考え方がある事が身を持って感じたと思います。
これからの人生、沢山の人達の意見に出会う中で、ただ流されるのではなく自分の意見をしっかり持った上で他を認め受け入れる事ができる強く優しい心をこれからしっかりと養っていって下さい。

研修は終わりましたが、皆さんはスタート地点に立ったばかりです。世界は国際化が進み、海外や国内という線引きが無くなってきている昨今ですが、人それぞれ誰にでも故郷があるということには変わりはありません。私は被災地支援の2年間で人と人との繋がりが地域を、そのまちを最も強くするのだと確信しました。生まれ育った故郷のために、この研修に参加した皆が岩手の、日本のトップランナーとして共に走り続けていってくれる事を切に願います。

そして、一回りも二回りも成長した皆さん全員にいつか又逢えるのを心から楽しみにしています。

最後になりましたが、この研修にはベネッセホールディング様を初め国内、国外問わず沢山の方々からのお力添えを頂きました。沢山のサポートがあったお蔭で実りの多い研修となりました。この場を借りまして厚く御礼申し上げます。

グッドネーバーズ・ジャパン　震災復興支援部
武鑓史恵

2014年2月発行

発行　特定非営利活動法人　グッドネーバーズ・ジャパン
〒143-0016
東京都大田区大森大森北1-14-2 大森クリエイトビル3F

編　集：武鑓史恵　東江菜の葉　谷口真菜実　渡部真梨子　内田愛美

Benesse®

ベネッセ募金

この事業は「ベネッセ募金」からのご寄附により実施されました